

[48] Crossover

<https://hdl.handle.net/2324/7162230>

出版情報 : Crossover. 48, pp.1-, 2023-03. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン :
権利関係 :



CROSSOVER

No.48 March,2023



ISGS

九州大学大学院

地球社会統合科学府

Graduate School of Integrated Sciences for Global Society

Contents

巻頭言

惑星地球の各地をフィールドに	松井 康浩 ...	1
----------------------	-----------	---

新任教員紹介

異分野の研究に触れる楽しさ	加藤 千恵 ...	2
データとモデルから意思決定・社会経済現象・政策効果を分析する	栗田 健一 ...	3
「博士論文を書き終えて」の一步先で	山本 明日香 ...	4

受賞報告

英語コーパス学会学生優秀発表賞受賞	畔元 里沙子 ...	5
若手最優秀発表賞を受賞して	佐野 亘 ...	6

自著を語る

ある教科書的書籍の刊行と学府での教育について思うこと	阿部 康久 ...	7
日韓の交流と共生——多様性の過去・現在・未来——	辻野 裕紀 ...	9

アクティビティ

未来共創リーダー育成プログラム令和4年度授業のご紹介	佐藤 敦郎 ...	11
水共生学 キックオフ・シンポジウムの開催 「水共生学の船出 ～水-ヒト-生き物が共生する未来を目指して～」	藤岡 悠一郎 ...	15
水共生学 公開シンポジウムの開催 「めぐみの水・わざわいの水 ～武雄での水共生のこれまでとこれから～」	藤岡 悠一郎 ...	17

新しい出発

自信、湧いてきました	中立 悠紀 ...	19
------------------	-----------	----

博士論文を書き終えて

博士論文を書き終えて	謝 帆 ...	21
万物の逆旅、百代の過客	孫 平 ...	22
博士後期課程を自省して	御代川 涼 ...	23

大学院データブック

地球社会統合科学府 令和四年度 修士課程修士論文題目一覧		24
------------------------------------	--	----

表紙の説明

ロゴマークは、「地球社会統合科学府」の6つのコースを表わしています。すなわち「地球社会統合科学府」そのものです。本学府の理念にある「現場主義の精神」、「フィールドワークによって諸問題を究明する」姿を、ロゴマークが地球規模の遥かなる未知の領域へと飛び立つ姿、または、地球と地域をリードしていく姿の象徴として表現しています。

惑星地球の各地をフィールドに

松井康浩

(地球社会統合科学府 学府長)

2023年(令和5年)度、地球社会統合科学府は設置から10年という節目の年を迎えます。「地球社会的視野に立つ統合的学際性」の教育理念を掲げた本学府は、「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」、「フューチャーアジア創生を先導する統合学際型リーダープログラム」という二つの事業を5年間にわたり並行して実施してきました。また、同プロジェクト・プログラムを継承する形で、2022年度には「未来共創リーダー育成プログラム」をスタートさせ、今日に至ります。

以上に共通するのは、いうまでもなく「統合的学際性」のアプローチですが、「フィールド」を重視する姿勢もそれに加わりま
す。現場には様々なテーマや解決すべき課題があり、であれば

フィールドに根差した教育研究を進めるには、その問題に学際的にアプローチすることが不可欠で、統合的学際性とフィールド重視の両者は双方が支えあう関係にあります。本学府は、修士課程学生に履修を義務付けた共通科目に「地球社会フィールド調査法」を設けていますが、そこにも現場重視のスタンスは現れています。

さてこの間、学府長としての私は、シンポジウムや式典などで挨拶をする機会がたびたびありました。その際、本学府の特徴を平易に宣伝するため、「南極から秋葉原まで」といったフレーズをしばしば用いてきました。学府が擁する教員の専門分野の広がりに加え、研究対象とするフィールドの多様性を示すにあたりその言葉がふさわしいと考えたからです。

このフーズの契機となったのは、地球社会統合科学府の前身である比較社会文化学府の入学式でした。私が2007年に同学府に異動してきた直後の式だったかと記憶します。当時、学府は六本松にあり、その大教室（J3）で行われた学府の入学式には新入学生だけでなく、大半の教員も姿を見せていました。当時、教員が入学式の席上で一言、自己紹介をするのが慣例だったからでしょう。数十人の教員が自己紹介をする流れの中で、いつしか、各人が研究対象とする自身のフィールドに触れるルー

ティンが生まれ、地球科学を専攻する先生が、私のフィールドは南極ですと言うと、「おー」というどよめきが起こり、その流れで、漫画やアニメなども研究対象とする社会学の先生が、私のフィールドは「秋葉原」ですと語って「笑い」を誘いました。

その他、アマゾンやアフリカなどなど世界に広がる

あちこちをフィールドにする教員が次々に発言し、ユニークな大学院だなあと実感した次第です。南極をフィールドにする教員と秋葉原をフィールドにする教員がともに並び立つ大学院は、日本中を捜してもおそらくここだけではないかと想像します。そのインパクトもあって、私は、「南極から秋葉原まで」というフレーズを、折に触れ使ってきました。実際、若い世代の教員がその後も南極調査に出かけられ、南極をフィールドにした地球科学の研究は我が学府の特徴、研究の目玉の一つになりました。

さて、ここ3年間に、本学府には新しい教員が次々と赴任しています。ディシプリンとしては、文化人類学、哲学、文学、地球科学、経済学、公共政策学、データ・サイエンスなどの広がりを見せ、対象フィールドは、ネパール、イラン、ラオス、ロシア、インドなどの国々に、地下や海面下と、地球の各地がフィールドに加わ

り、大規模データや人の感覚の世界にもその地平は広がります。

私たちの生きる惑星地球
とそこに住まう生物や人間の
世界を対象に、地球社会的
視野に立つ統合学際性のア
プローチを駆使し、新たな研
究を切り開く皆様の入学を心
よりお待ちしております。

[illegible]

第20回地球社会統合社会セミナー

文化が動く、文化を表す
地球社会統合科学府の新しい息吹

日時：2021年6月4日(金)13時30分～16時30分
会場：オンライン(Zoom)
司会：吉谷嘉孝（文化人類学）

・吉川不可知(文化人類学)
「シェルパ」の道の人々について
ヒマラヤを歩きながら考える

・藤原 寛(文化人類学)
インテリクスタから学ぶ人学
人文学を实践する奥深さ

・渡戸 亨(哲学)
悪いインテリクスタを悲しくさせる
のか

・松林佳章(文学)
文学の「間」を学ぶ：
近代日本の文学者たちとロシア

講演者プロフィール

吉谷 嘉孝 文化人類学
山形大学 文化社会学部文化科学研究科准教授
北原 展 文学部国文学科准教授(文学部理科大学)

講演者プロフィール

吉川 不可知 文化人類学
山形大学 文化社会学部文化科学研究科准教授
藤原 寛 文化人類学
山形大学 文化社会学部文化科学研究科准教授
渡戸 亨 哲学
山形大学 文化社会学部文化科学研究科准教授
松林 佳章 文学
山形大学 文化社会学部文化科学研究科准教授

法政文化研究会・地球社会統合科学部 藤原隆子主宰

データから切り開く 地球社会統合科学の新展開

日時：2022年6月10日(金) 14時50分～16時30分
会場：オンライン(Zoom)および**E-C-203(イス1番席)**
ZOOMのアドレスは、事務局のEメールで連絡します。

司会：三國一夫

インドにおける宗教と経済行動 	山本 明香 (社会発展学・講師) 専攻は環境政治経済学。インドの経済、特に宗教と、企業活動との関係に関心がある。インドに滞在し、現地の企業や宗団体などと交流し、研究を行っている。また、学生が海外でフィールドワークを実施する際、現地支援もしている。
データとモデルから意思決定を分析する 	栗田 健一 (基幹理工学部・講師) 大学時代に統計学を専攻し、応用数学の統計学を専攻。特に「線形計画法」や「ゲーム理論」などに興味があり、現在では「機械学習」という分野にも関心をもち、研究している。九州大学大学院工学研究院にて博士号取得後、東京大学で修士号取得後に、同大学の助教として勤務していた。

「磁気」の視点からの地球科学と学際研究



加藤 千也
(基礎理工学部・助教)

自然科学系理系の博士課程の卒業生であり、現在は、地質学と物理学、特に地電磁気学を中心に研究している。博士論文で地電磁気学の観測と数値シミュレーションを用いた研究を行い、その成果を発表している。

異分野の研究に触れる楽しさ

加 藤 千 恵

(地球社会統合科学府 包括的地球科学コース)

(比較社会文化研究院 環境変動部門)

2022年4月に比較社会文化研究院に着任しました、加藤千恵と申します。2018年に東京工業大学にて博士(理学)の学位を取得したのち、地球変動講座の大野正夫先生の研究室に学術研究員として在籍し、その後半年間東京工業大学の研究員を経て、2020年度から学振PDとして比文に戻っておりました。なじみ深い比較社会文化研究院・地球社会統合科学府ですが、心機一転、頑張っていきたいと思います。

こどもの頃から生命の歴史や恐竜などの今は滅んでしまった生物に興味があり、生物の進化や絶滅をもたらした地球環境の変動について学ぼううちに、地球そのものの構造や進化についてもっと知りたいと思い、地球科学を志しました。大学で地球惑星科学科に進み、授業や実習を通してマントルやコアといった地球深部の世界に魅力を感じたため、卒業研究では高圧実験の研究室を選びました。地球の半径約6,400kmのうち、中心から約3,500kmは鉄を主成分とする金属でできたコアで、その外側にカンラン岩やその高圧相などの岩石でできた分厚いマントルがあり、表層のわずかに数kmから数十kmを地殻が覆っています。私たちが実際に手にすることのできる試料は表面の薄い地殻のものがほとんどで、マントル捕獲岩やオフィオライトなどの例外を除き、地球の体積の大部分を占めるマントル、ましてやコアの物質は直接手にすることはできないのです。さらに、地球の内部は非常に高温かつ高圧の世界で、コアとマントルの境界では3,500 K (ケルビン)・135万気圧、地球の中心では5,000K・364万気圧にも達します。このように表層とかけ離れた環境でコアやマントルを構成する物質がどのような物性を示し、地球の進化の歴史にどのような役割を担ってきたのかを解明するため、プレートテクトニクスの作用によって地球内部にもたらされた地殻物質の高圧相転移や溶融に関する実験、コアに含まれる軽元素を推定するための実験を行っていました。

そんな研究を進めていくうちに、実験室で合成される単純化された系ではなく、実際の地球の試料を使った研究がしてみたいと思うようになりました。悩みに悩んで当時の指導教官に相談したところ、ちょうど東工大に着任されたばかりであったJoe Kirschvink先生につくことを勧められ、古地磁気学の研究を始めることになりました。博士課程の後半から現在まで、鉱物単結晶を使った地球磁場強度の長周期変動の解明というテーマに取

り組んでいます。詳しくは2021年3月発行のCROSSOVER 第46号に書かせていただきましたので、興味のある方はお読みいただけますと嬉しいです。

地磁気・古地磁気・岩石磁気学のコミュニティに身を置き、学会や研究集会に参加する中で、地球磁場と地質試料の磁性を用いた研究のカバーする範囲の広さに驚かされました。地球磁場そのものの性質を解明し、その源であるコアの性質や地球内部の歴史を探究する研究、岩石や堆積物などがある時点の地球磁場を記録する性質を利用した地殻の移動履歴の推定や年代決定、環境に応じて変化する磁性鉱物の種類や量、粒子の大きさの違いを利用した気候や環境変動に関する研究などなど。特に、大野先生らのグループが取り組んでいる考古学との融合研究には大変興味を惹かれました。生命の歴史と並んで人類の歴史にも興味があったのですが、地球科学を選んだ段階で人文科学としての歴史を研究することは半ば諦めたような気持ちだったので、思いがけず自分の学んできたことが考古学の研究にもつながることを知り、可能性が一気に広がったように感じられました。

昨年度から私自身も磁性の変化に着目した土器焼成環境と焼成時の化学反応の解明という分野融合的なテーマに取り組んでいます。高圧地球科学から古地磁気学・岩石磁気学に専門分野を変え、考古学・文化財科学との融合研究にも携わるようになった経験から、異なる分野の研究者と交流し、考え方を学ぶことの楽しさ、重要性を感じてきました。私自身も、多様なバックグラウンドをもつ地球社会統合科学府のスタッフ、学生の皆様にとって刺激となるような「異分野の研究者」でいられるように頑張りたいと思います。



西オーストラリア・ビルバラにて古地磁気測定用の定方位試料を採取中の筆者

データとモデルから意思決定・社会経済現象・政策効果を分析する

栗 田 健 一

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース、社会的多様性共存コース)

(比較社会文化研究院 環境変動部門)

2022年5月に比較社会文化研究院に着任した栗田健一です。私の専門は応用ミクロ経済学です。学部時代にミクロ・マクロ経済学やゲーム理論、計量経済学を学び、これらの手法を用いて、社会経済問題のメカニズムや政策の効果を分析し、社会をより良い状態に変えたいという志から大学院に進学しました。大学院では様々な講義やゼミ、学会に参加し、とても充実した院生生活を過ごしました。

私の院生時代の主な研究テーマは、福祉制度におけるスティグマの経済分析です。貧困からの救済を目的とした生活保護のような福祉制度において、貧困状態であり福祉を受給する資格があるにも拘らず、福祉を受給していないという家計が存在することを漏給と呼びます。この漏給の原因として、様々な要素が考えられますが、特に重要な要素のひとつがスティグマ(社会的烙印)です。スティグマは古代ギリシャにおいて、奴隷や罪人に彫っていた刺青や焼印に起源していると考えられています。このスティグマは、視覚的に観察可能な属性だけでなく、学歴や職業、そして福祉の受給といった非視覚的な属性に対しても生じる可能性があります。私の修士論文と博士論文では、スティグマによる心理的コストがプレイヤー(意思決定主体)の意思決定に影響を与え、また各プレイヤーの意思決定もスティグマに影響を与えるという状況を分析しました。興味のある方は、一般向けの記事を東洋経済オンラインに掲載しているので、こちらをご覧ください(<https://toyokeizai.net/articles/-/574540>)。この研究は、まず数理モデルを構築し、スティグマの強度と各プレイヤーの意思決定の均衡解を導出し、導出した均衡解において政策変数が変化した場合の影響を分析しました。次に理論分析の結果OECDパネルデータを用いて検証し、理論分析の結果が頑健であることを明らかにしました(<https://doi.org/10.1111/ijet.12295>)。現在はベーシック・インカムと生活保護制度の比較分析を進行中で、研究成果の一部を査読付き国際誌に掲載しています。

他の研究プロジェクトも行なっているので、幾つか紹介します。新型コロナウイルス(COVID-19)の感染拡大下における緊急事態宣言の外出自粛効果を人流データを用いて検証しまし

た。この研究は査読付き国際誌に掲載しています(<https://doi.org/10.1007/s41885-020-00077-w>)。また、進化ゲーム理論を用いて動学分析した研究も行い、こちらは公共選択学会から川野辺賞を受賞し、その研究成果も査読付き国際誌に掲載しています(<https://doi.org/10.1007/s13235-022-00426-2>)。さらに、緊急事態宣言が発出回数を重ねるにつれて、自粛効果が弱まっているという仮説を検証しました。

無作為化比較試験を行い、環境教育が向環境活動に与える影響を検証する研究も行なっています。こちらは、RIETI(経済産業研究所)のディスカッション・ペーパーとして公開し、現在査読付き国際誌へ投稿中です(<https://www.rieti.go.jp/jp/publications/summary/22050012.html>)。

企産学連携プロジェクトも行なっています。株式会社ふくおかフィナンシャルグループ及び株式会社サステナブルスケールと共同で、約200項目の評価データを用いて、企業の相対的なSDGs/ESGに関係する取り組みを評価するための指標であるSustainable Scale Index (SSI)を開発しました。このSSIは、株式会社福岡銀行、株式会社熊本銀行、株式会社十八親和銀行に提供を開始しています。企業のSDGs/ESGの達成度を数値化することによって、持続可能なより良い社会の実現に貢献することが目標です。詳細はこちらをご覧ください(<https://www.s-scale.co.jp/>)。

他にもご紹介したい研究がありますが、紙幅の都合上こまめに留めます。

(写真) 共同研究のため、La Trobe大学(メルボルン)に滞在した時の写真です。自然豊かなキャンパスで、芝生の上で論文を執筆していたのが良い思い出です。



「博士論文を書き終えて」の一步先で

山本 明日香

(地球社会統合科学府 国際協調・安全構築コース)

(比較社会文化研究院 社会情報部門)

2022年4月に比較社会文化研究院に着任しました山本明日香と申します。生まれも育ちも関西で、去年就職活動で初めて福岡の土を踏んだ程度には「よそ者」なのですが、先生方や皆様に温かく迎え入れていただき感謝しております。

私の専門は開発経済学とインド経済論です。……と書くことすら、実は抵抗感があります。というのも、私は2022年3月に博士(経済学)の学位を取得したばかりなのです。「博士論文を書いた結果、自分は何も分かっていないことが分かった」というのが正直なところで、「専門」について語れるようになるには、まだまだ時間がかかりそうです。この原稿の掲載箇所も「博士論文を書き終えて」のほうが適しているのでは?とありますが、前置きはこのくらいにして、私のこれまでの研究について簡単にご紹介することにします。

私は宗教と経済行動の関心に興味があります。大学院在学中から、インドの個人・家計レベルの調査(マイクロデータ)と計量経済学の手法を使った研究をしてきました。分野全体では、「個人の宗教性が人的資本にどう影響し、それが経済全体の成績にどのような影響を与えるか」、「経済発展や制度はどのように宗教への参加や信仰に影響するか」などを大きな問いとして、様々なデータによる研究が行われています。

インドが多宗教国家であることはよく知られているでしょうし、宗教に関連した聖地や祭りなども有名だと思いますが、実は人々の生活と宗教の関係は、文化的な側面に限りません。例えば、婚姻や相続などの規定は統一されておらず、それぞれの宗教法や慣習法が運用されています。つまり制度的にも宗教は重要な情報であり、政府系のマイクロデータでは、個人あるいは世帯主の宗教について必ずと言っていいほど質問されています。日本の調査では考えられないことです。

近年、インドの人々の中で宗教の位置づけが何らかの形で変化しているかもしれません。「世界価値観調査」の1990年と2012年の調査結果を比較すると、「神を信じるか」、「宗教を重要であるか」といった質問はいずれも高い水準で肯定されています。一方で「定期的に礼拝に参加している」人の割合は減少しています。要するに、個人の宗教心と実際の宗教行動は異なっている可能性があります。その理由としては経済発展および所得の上昇、余暇の過ごし方における選択肢の拡大など、

様々な仮説や要因が考えられます。

簡単に「宗教と経済の関係」と言っても実態は極めて複雑であることが窺えます。したがって、様々な角度から相互の影響を慎重に検証していかなければなりません。私の研究はその中のごく一部で、大別すると相続法改正の研究(新たに相続権が与えられた女性の教育水準や健康状態が改善していた一方で、別の相続法が適用される宗教の人々については改善がみられなかった)、宗教間賃金格差の研究(社会的に劣位にあるヒンドゥー教徒の下位層とイスラーム教徒との間の平均賃金の差は拡大しており、その由来は多くが教育レベルの差異で説明できた)、巡礼の研究(支出が高い人ほど巡礼に行っておらず、宗教によっても行動に差があった)の3つです。とはいえ研究上の課題も多く、更なる精緻化が必要です。



(筆者撮影、ビハール州某所にて(2019年))

このご時世、学位取得直後に職を得られたというのはとても幸運なことです。ただ私の肩書がどうであれ、「博士論文を書いただけの人」が最初の一步を踏み出した段階であることに変わりはありません。当然、見えている景色はそれほど変わらないのです。ですから特に学生の皆様とは、お互いに学びあうつもりで接することができればと思っています。本当の意味で「教えられる」ことは何もありませんが、ぜひお気軽に声をかけてください。

余談ですが、私はマイケル・ジャクソンのアルバム『Dangerous』が大好きです。そのオープニング・トラックである「Jam」で歌われている協同や自己確立のメッセージは、どこか地球社会統合科学府の理念に通じるところがあります。“Nation to nation, all the world must come together / Face the problems that we see then maybe somehow we can work it out”——一緒に頑張らしましょう。

英語コーパス学会 学生優秀発表賞 受賞

畔元 里沙子

(地球社会統合科学府 言語・メディア・コミュニケーションコース)

2022年10月、英語コーパス学会より学生優秀発表賞を頂きました。英語コーパス学会は1993年に創立され、英語コーパス及びコーパスツールの開発・評価・利用に関わる研究、また、英語コーパスを用いた言語研究・言語教育研究・関連研究を促進することを目的として活動しています。会員数は300を超え、日本におけるコーパス研究の代表的な学会です。

英語コーパス学会は年に1度大会を開催しており、私が初めて博士後期課程1年次に発表を行った2020年度大会から、学生会員且つ大会において単独発表を行った者を対象に、学生優秀発表賞を1〜2名決定しています。私は2020年度、2021年度、2022年度と3度この賞に応募しており、3度目の正直での受賞となりました。

学会名にも含まれる「コーパス」は、新聞、本、インターネット上の記事の中身といったあらゆる文字情報や、話し言葉を文字化したものを、コンピューター上で検索や分析ができるように集積したデータベースのことを表します。英語コーパス学会では、主に英語のデータベースを対象とした研究が発表されています。その中で、私が今回発表した「高校英語教科書におけるコロケーション：基本動詞に着目して」の内容について紹介させていただきます。

本研究は、高校英語教科書にて使用されている基本動詞を含むコロケーションをリスト化し、その特徴を把握することを目的として行われました。「コロケーション」とは、自然言語の中で通常一緒に使用されることが多い単語と単語の組み合わせのことを表します。例として、heavy rain やraw dataなどが挙げられます。本研究では、2018年に自身が作成した日本で使用されている高校英語教科書6シリーズ計18冊のリーディングパートを集積したコーパスを使用し、統計的手法を使用し1189タイプの英語教科書で使用されるコロケーションをリスト化しました。その後、それらのコロケーションについて、シリーズ間での共有率、各シリーズ内での再現率、それらが実生活で使用する表現を含んでいるか、学術英語で使用する表現を含んでいるか、の4点について分析、考察を述べています。

昨今、英語教育には高い関心が向けられており、教科書研究は日本における英語教育の質の向上のために不可欠です。また、コロケーションについても言語研究の全体の歴史の中では比較的新しい分野にはなりますが、コロケーションの習得は英語学

習者にとって流暢な英語を話す、書くことができるようになる鍵だと考えています。本研究は計画している博士論文の一部となる予定です。これからも、日本での英語教育の質の向上に少しでも役に立つような研究に邁進したいと考えています。

個人的に、英語コーパス学会の大会は参加した3度とも思い入れの深いものでした。2020年度では初めてのオンライン学会への参加で、聞き手の表情が見えない中で緊張した発表。2021年度は第一子出産後、産院から発表募集に申し込み、その3か月後に泣き止まないわが子を抱きながら夜な夜な作成したパワーポイントを使用しての発表。そして2022年度は1歳になった我が子が隣で聞いている中での発表となりました。回を重ねるごとに学生発表の数が増え、2022年度は多数の素晴らしい発表をする学生がいっぱいだったので、閉会式にて私の名前が呼ばれた時には大変驚きました。夫と子供に見守られながらの受賞スピーチとなり、とても感慨深かったです。子育てをしながらの学会参加は遠方だどうしても難しいことが多く、このようにオンライン学会になるのは一般的にはデメリットも多くありますが、子育てをしながら学会に参加する身としてはとてもありがたく感じています。

最後にこの場をお借りして、日頃からご指導いただいている内田諭先生、およびご指導、ご助言いただいています皆様方に、心より感謝申し上げます。これからもこの賞に恥じぬよう、研究を頑張っていきます。



若手最優秀発表賞を受賞して

佐 野 亘

(地球社会統合科学府 包括的地球科学コース)

発表タイトル:

「石垣島名蔵湾のサンゴ礁における干潟・海草帯の発達史」

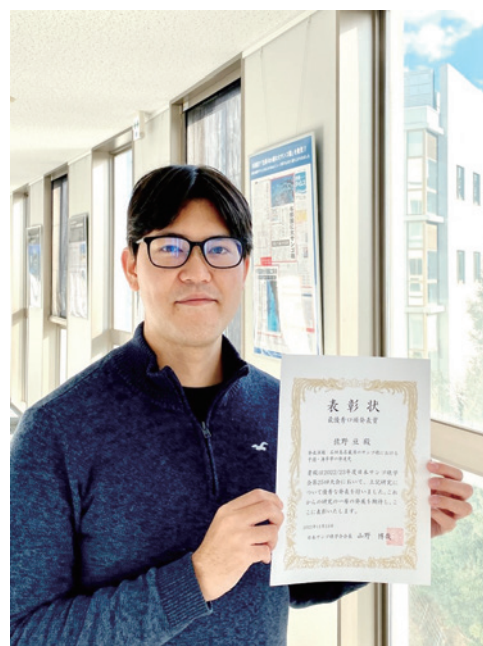
2022年11月11～13日に沖縄県石垣市で開催された日本サンゴ礁学会第25回大会にて、若手最優秀発表賞(口頭発表)を受賞いたしました。

私が研究対象地域としている海草藻場など沿岸の浅瀬は、豊かな生態系を育む一方で人工的改変の影響を最も受けやすい地域のひとつとされています。石垣島の西岸にはマングローブ林と広大な干潟、そして沖合にはサンゴ礁が広がる、名蔵湾という場所があります。このマングローブ林は名蔵アンパルと呼ばれ、ラムサール条約登録湿地、西表石垣国立公園の一部にもなっています。しかし、近年は農地開発等による影響で名蔵川河口付近の赤土土壌の流出が問題となっており、台風や大雨のたびに大規模な赤土の流出が確認されています。また観光用施設の建設が計画されるなど(2022年12月現在は計画の中止が発表されている。)、さまざまな人為的な攪乱に晒されている場所です。

本研究では石垣島の名蔵にて、マングローブ林・干潟・サンゴ礁の一連の環境がどのような過程で形成されたのかを高解像度な時間データと共に明らかにしました。私は2020年に日本学術振興会の特別研究員として、後輩の修士学生2名と共に名蔵の干潟・海草帯でのボーリング調査を実施しました。そこで採取したボーリングコアサンプルを用いて、共同研究先である東京大学大気海洋研究所にて高解像度な年代測定を自ら実施しました。これらの研究活動の結果、現在は海草などが繁茂する名蔵の干潟(泥地)が、およそ4000年前以前にはサンゴが多く生息するサンゴ礁の海であったことが明らかになり、縄文時代の海水準変動に伴ってサンゴ礁の海底が徐々に陸域起源の堆積物で覆われていったことが新たにわかりました。本研究は、これまで別々で議論されることが多かったサンゴ礁・干潟や海草帯・マングローブ林のそれぞれの沿岸生態系を、その発達史を通して一連のゾーネーションとして捉えた新規性の高い研究となりました。また昨今、自然保護の観点から注目が集まっている名蔵の自然について、地質学的なアプローチからその自然環境の固有性を明らかにすることができたと考えています。

本研究の発表後、学会会場にてさまざまな方に研究内容について声をかけていただき、その中には地元石垣島のネイチャーガイドや環境団体の方々もいらっしゃいました。石垣市開催の大会で名蔵の自然に関する研究発表をすることができたことで、日頃からフィールドワークを行なっている石垣島の住民の方々にもその成果をフィードバックすることができたのではないかと思います。研究者の先生方はもちろん、地元の方々を含め本研究の内容に対し反響があったことを大変嬉しく思います。

本研究は堆積物コアサンプルを採取するためにボーリング調査の過程で地面に穴を開け、調査地点の自然環境を攪乱しています。非常に小規模ではありますが、環境破壊をして得たサンプルということになります。この研究がもたらす社会的インパクトが自然環境へのさらなる理解を促せるような物になるように、その責任を持って研究をしていきたいと考えています。この研究内容が少しでも多くの人の目に留まり、名蔵湾の自然や地史について知っていただけたら嬉しいです。そのためにも貴重なサンプルを使って更なる分析をすすめ、論文化をしていきたいと思っています。学生の身分での最後の学会となる日本サンゴ礁学会でこのような賞を頂けたことを大変光栄に思います。今回いただいた賞に恥じぬようこれからも精一杯研究活動に邁進して参ります。



ある教科書的書籍の刊行と学府での教育について思うこと

阿 部 康 久

(地球社会統合科学府 国際協調安全構築コース)

2022年3月に土屋純・山元貴継氏との共編著として(また岡本耕平氏の監修により)『論文からまなぶ地域調査』(ナカニシヤ出版)という書籍を刊行させて頂いた。

本書は、地理学や関連する分野で報告書や卒業論文を書くという学生向けに、研究テーマや論文執筆に必要な手法や手続き等を、実際に電子ジャーナル等に掲載されている論文を例に挙げながら、その元論文の筆者が論文作成に至るまでの裏事情なども含めて、分かりやすく説明した参考書である。具体的には、人文地理学、自然地理学、地理教育、GISなど地理学の幅広い分野を専門とする23人の研究者が執筆者となり、自身が執筆した論文・著書・報告書等の原稿を持ち寄り、その内容に基づいて上記の点を解説している。

これまで、本書と同様のコンセプトの教科書はなかったわけではないのだが、類似するコンセプトの書籍はやや専門性が高く、主に大学院生向けの内容のように思えたため、本書では、読者層として学部2年生から卒論を執筆する4年生程度を想定し、学生の参考になるような内容を目指した。そのため、1章あたりの分量は、原則として7,000字程度に収めるように内容を厳選して執筆してもらうこととし、分量が多くなった一部の執筆者には、内容を複数の章や別枠のコラムに分けて執筆してもらうようにした。具体的には、もともになった論文を出典として示し、詳しい内容や参考文献は極力、もともなった論文を参照してもらうようにし、テーマ設定や調査方法、論文執筆の際に工夫した点等に絞って執筆している。加えて本書では、卒業論文のレベルをできるだけ超えない範囲で、海外での調査や、社会的な意義の強い応用的調査・社会实践などの例も含めるようにした。

本書の執筆者らには、地理学を専門に学ぶ講座等に教員として所属しているものもいれば、人文・社会科学を広く勉強する学部または学際的・国際的な分野を学ぶ学部等に所属しているものもある。特に後者の場合は、地理学を体系的に教育しているわけではないので、指導する学生に地理学的な卒業論文を書いてももらうことが難しいと感じることもある。

このような様々な分野を専攻している学生に対して、地理学の各分野への理解と研究テーマの設定、論文リテラシーの向上、研究手法の体得、調査結果のまとめ方などが学習できる内容を

目指している。特に調査方法や調査内容のまとめ方、論文の書き方を中心に、それ以外の内容もバランスよく盛り込んでいくことを心がけた。調査の際の安全確保(第17章)や調査データの適切な扱いなどの研究者倫理やデータ・資料の適切な管理に関する説明(第3章、第4章、第11章、第15章等)も加えている。

このように本書は、学際的な学部で学ぶ学生も想定しながら論文執筆の手法などについて解説しているので、大学院生でも、学部時代に地理学や地域研究などの分野を専攻してこなかった人にとっては、参考にできる内容が含まれているのではないかと考えている。

以上で説明したように、本書は、元々の内容自体が「自著を語る」ようなものになっている。そのため、さらに、本欄にてさらに書かせて頂きたい内容は多くはないのであるが、このクロスオーバーは、地球社会学府の受験希望者の方々も読まれると思うので、以下のことを述べさせて頂きたいと思う。本書で、私自身が担当した3つの章で取り上げた3編の論文のうち、2編は地球社会学府の指導学生との共著論文である。そのうち1編は、共著者(第1著者)である大学院生の博士論文の一部になった論文である。

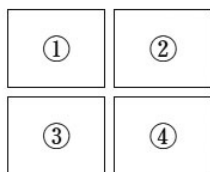
このように、紹介した論文の中に、大学院生との共著論文を取り上げた理由として、筆者が属する人文地理学の分野では、全体的に査読付きの学会誌に掲載されるような論文を執筆するのが難しくなっており、当該分野の主要学会誌において、掲載論文数の不足が慢性化している状況がある中で、大学院生には、共著の形であっても雑誌論文を書いてもらいたいという気持ちがあったからである。

特に、同書を企画し編集作業をしていく中では、人文地理学の分野では、安全管理やデータ・資料の管理に加えて、個人情報やプライバシーの保護に関する意識が高くなっている中で、特にインタビュー調査やアンケート調査などの個人情報を扱うフィールド調査の実施が難しくなっているのではないかと考えることもあった。

例えば、本書では裏表紙に何枚かの写真を掲載したのだが、そのうちの2枚は、バングラデシュにおける現地調査での調査対象者と学外授業で現地調査を行っている学生さんの写真を採用

〇 〇 〇 自著を語る

している。ここでは、いずれも非撮影者の顔が正面からは写り込んでいない写真を採用することになった。編者・執筆者らの間での議論の際にも、執筆者らが学生だった頃に比べても、個人情報や肖像権への配慮がより重視される時代になったことを認識させられることがあった。このような編集作業の際にも、研究活動に際するコンプライアンスの順守が必要であることを再確認することができた。



◎裏表紙の写真

- ①地理学の学会誌(歴史地理学, 経済地理学年報, 新地理, 地理空間, 人文地理, 地理学評論, 都市地理学)〔撮影: 山元貴継〕
- ②幅広い層からのアンケートから, 観光地の実態が見えてくる〔提供者: 山元貴継〕
- ③桜島安永噴火による移住の歴史を伝える石碑(宮崎県都城市)〔提供者: 大平明夫〕
- ④宗教歌を歌うバングラデシュの物乞い。施しの与え手には祈りも捧げる〔提供者: 杉江あい〕

本書の裏表紙に掲載された写真とその説明文: 非撮影者の顔が正面から写りこんでいないものを選定している。

このように全体的にフィールド調査が難しくなっている点に加えて、本学府の学生さんの場合は、学際性を重視する本学府の方針や、実際に進学する学生の多くは留学生と社会人学生であることもあり、当方自身は、当該分野においては大学院生が単著で論文を書くことが、以前に比べると難しくなっていると考えられるようになった。また、当方は2007年10月から、地球社会学府

の前身の比較社会文化学府にて教員をさせて頂いているが、特に博士課程の学生数については時期によって進学希望者のバラつきが大きく、有望な学生さんが同時期に複数進学して来られることもあったのだが、数年間進学希望者が1人もいない時期もあった。そのため、何らかの形で、論文の質を確保しながら博士号を取得しやすくする方法を考えなければとも考えていた。そこで当方のゼミでは、大学院生が博論の元論文となる雑誌論文の原稿を、査読誌に投稿しやすいように、文系の分野ではまだ多くはないのであるが、大学院生と共著論文の執筆も行うようになった。

その際には、大学院生の皆さんには、教員との共同研究として研究を実施したり、共著論文を執筆したりする際には、教員の支援に過度に依存しないように強く釘を刺させて頂いている。特に博士課程の学生が学位論文を執筆する際には、元になった雑誌論文のうち少なくとも1本は単著で執筆してもらうようお願いしている。また、このように大学院生との共著論文を書くことで、教員である当方自身が単独で行いたかった研究ができなくなるなどのデメリットも生じてきた(もちろん、共著論文だったからこそできた研究も多々あるので、実際には教員にもメリットはある)。しかしながら、最近では、何とか博士論文提出までこぎつけ、研究職あるいは研究内容を活かせる職に就くことができた学生もある程度は出てきてくれている。つい先日(2022年12月)のことになるが、修了生の方でテニュアトラックのような形で大学に就職していた人で、テニュア採用に決まったとの連絡をくれた方もいた。このような報告を聞くと、苦勞して学生さんのお手伝いをしてきたことに、ある程度の救いを感じることができる。

また、大学院生が博士課程に進学し、博士論文の執筆・授与にまで至るためには、指導教員が研究指導や補助をするだけでは成し遂げることが難しいハードルが多く存在している。学府の先生方をはじめとして学内外の多くの方々や機関・制度によるご助力がなければ、学生がこのような結果を出すことは難しかったと思える。この場を借りて、皆様の多くのご配慮やご助力に心より御礼申し上げます。

日韓の交流と共生 ——多様性の過去・現在・未来——

辻 野 裕 紀

(言語文化研究院)

(言語・メディア・コミュニケーションコース)



『日韓の交流と共生：多様性の過去・現在・未来』（森平雅彦・辻野裕紀・波潟剛・元兼正浩編）は、九州大学韓国研究センターの分野横断プロジェクト「東アジアにおける人の国際的移動：日韓の交流と共生、および多様性の追求」（韓国国際交流財団助成事業）の一環として行われた講演会やシンポジウム、研究会などの成果を書籍化したものである。2022年8月に九州大学出版会から「九州大学韓国研究センター叢書5」として刊行された。本プロジェクトの足跡は、深川博史・水野敦子編著『日韓における外国人労働者の受入れ：制度改革と農業分野の対応』（九州大学韓国研究センター叢書4、九州大学出版会、2022年）にも結晶しているが、同書が経済学関連の研鑽の集成であ

るのに対し、本書は歴史、教育、言論、文学、映画などに関わる諸論攷から組成されている。本来ならば、本稿は、筆頭編者である森平雅彦先生にご執筆いただくべきところであるが、所属部局の関係で、僭越ながら、私（辻野）が筆を執っている点、何卒ご寛恕願いたい。

帯に「中世の海域交流から現代映画の世界まで」とあるように、本書の射程はかなり広い。構成は大きく鼎分され、具体的には、日韓の中近世史を俎上に載せた「第1部 つながる、交わる：対馬海峡沿岸社会における中近世の現場」、現代の教育実践・交流を描いた「第2部 出会う、伝え合う：学びの現場」、そして言論と表現をめぐる論件を扱った「第3部 ことばを超える、国を越える：相互理解の現場」から成る。各部はさらに複数の章に支分され、2編の附論も収めている。執筆者は総15名にも及び、大学所属の学究のみならず、作家や弁護士も含まれる。

紙幅の制約がある上、あまりに広範な学問領域に跨っていてすべての論攷に触れるには私の知的贅力が闕如しているため、本稿ではとりわけ、波潟剛先生と私が関わった第3部（言論、表現）についてのみ叙述することにする。

第3部は、上述の通り、「ことばを超える、国を越える：相互理解の現場」という題目の下、「言論と表現をめぐる問題を、主に「越境」という視点から」（本書「刊行にあたって」p.iii）論じたものである。言語論的な視座に照らせば、言語とは「個」に属するものであり、本来的に国家や国籍とは無関係である。言語と国家・国籍の付着は、近代的作為の帰結であって、言語の元来のありようではない。また、母語と母国語は全く別のレイヤーに位置付けられる概念であるにもかかわらず、未だに「外国語としての韓国語教育」、「日本人フランス語学習者のための教材開発」などといった表現が当然のように罷り通っている言語教育界の現状には心底辟易しているが、そうしたワーディングが何故に問題なのかは、例えば在日コリアン文学を読み開くことで了知する。波潟剛論文「在日コリアン文学の現在」は、深沢潮、崔実、ヤン ヨンヒ、柳美里という4名の在日コリアン作家の小説の読解を通して、日本と朝鮮半島の関係やその間の移動、文化的多様性と共存について思念する契機を提供してくれる。

〇 〇 〇 自著を語る

西谷郁論文「ディアスポラと労働・工作の表象」は、在日コリアン同様、〈コリアン・ディアスポラ〉というタームで括られる中国朝鮮族の映画監督チャン・リュルの作品群を解析した研究であり、チャン・リュル映画もまた東アジアにおける人的移動や多言語性をけざやかに描出するものである。〈多言語性とは単に言語が複数併存することではない。複数の言語があるのではなく、単数の言語が本態的に複数性を宿している。言語は混じり合うことをその本質とし、常に相互浸透的に入り混じったアマルガムである〉——これは私が日々の講義でよく口にする言辞だが、そうした言語論的に重要な事実を西谷論文やチャン・リュル作品は再確認させてくれるように思われる。なお、チャン・リュル監督の〈福岡三部作〉と呼ばれる『柳川』『福岡』『群山』は2022年末に全国に先駆けて福岡で公開が開始され、私もKBCシネマでの上映後のアフタートークのゲストとしてチャン・リュル作品について語ったり、公式コメントを寄稿したりするなどの機会を得たのは、幸運な偶然であった。

グカ・ハン講演録「母語でない言語で書くということ」、グカ・ハン×辻野裕紀対談録「フランス語のほうへ／から」は、前者の題名通り、〈母語でない言語で書くとはいかなる営為か〉という問題に肉迫した講演会の記録である。グカ・ハンは韓国に生まれ育ち、26歳で渡仏、そのわずか6年後にフランス語で短編集『砂漠が街に入りこんだ日』を上梓した。同書はフランスで刊行されるや、様々な書評で取り上げられ、「文学的大事件」と評されるなど、多くの読書人の耳目を引いた秀作である。グカ・ハンのような越境作家は、自らの意志で他者の言語を創作言語として選びとったという点において、在日コリアンの書き手たちとはまた別の意味で、言語論的思考や言語教育にも示唆を与えてくれる。本講演録および対談録は、グカ・ハンの言語観や文学観などについて、現時点で日本語で読める最も詳しいテキストであり、2023年度より使用される高等学校教科書『文学国語』（東京書籍）の教師用指導書にもその一部が掲載される予定である。

具良鈺論文「日本のヘイトと在日コリアンとしての生」は、近年社会問題化しているヘイト事件をめぐる、実際に裁判に関わった弁護士という立場から、事例を挙げつつ、当該問題を仔細に論じたものである。具弁護士自身、在日コリアンという当事者でもあり、そのメッセージは非常に重い。

以上、本書の第3部の内容について鄙見も交えながら述べてきたが、プロジェクト「東アジアにおける人の国際的移動：日韓の交流と共生、および多様性の追求」では、その他に私が企画・司会進行を担当したものだけでも、ヤン ヨンヒ監督オンライン講演会「いつの日か会えるかもしれない家族へ」、『きらめく拍手の音』作家イギル・ボラ氏講演会「音の世界と沈黙の世界のあいだ

で」（これはイギル・ボラ氏の日本での初の講演会となった）、カンヌ2冠の映画『ベビー・ブローカー』助監督の藤本信介氏講演会「映画のような21年のストーリー in 韓国」、東京大学教授で言語学者の福井玲先生講演会「小倉進平の遺産」など、本書には収めきれなかったイベントもあった。私の怠惰や多忙のせいもあって、これらを文字化して収録できなかったのは残念だが、本書は、先に言及した『日韓における外国人労働者の受入れ』と並んで、ここ数年の九州大学韓国研究センターの活動を象徴する、記念碑的な書籍と言ってよいだろう。巷間では「日韓関係の悪化」などといった表現が頻回に聞かれるが、一般に「日韓関係」とは政治レベルの話に過ぎず、字義通りの「日韓関係」は、様々な位相に横たわっている。K-POP、K文学、韓国映画など、これほど多くの「日本人」が韓国のカルチャーに夢中になった時代は、かつてなかったはずである。また、二項対立的な「日韓」ではなく、そのあわいに生きる人々も大勢いる。そして、本書の各論が活写するのも、実に多元的な「日韓関係」や「国際関係」であり、その奥底には「個」としての人間の営みが複雑に交錯している。粗笨に束ねられた「日韓関係」という輪郭なき集合的イメージから脱却し、人と人との繊細な交わりの現実を解像度を上げて丁寧に眺める複眼的視座を本書が少しでも示すことができれば、一編者としてとても嬉しい。

未来共創リーダー育成プログラム 令和4年度授業のご紹介

佐 藤 敦 郎

(未来共創リーダー育成プログラムサブリーダー)
(比較社会文化研究院)

未来共創リーダー育成プログラムは、高度に幅広い専門性から未来社会を構想し、オールラウンドな協働課題解決と決断、政策の立案と設計にあたることのできる研究者および高度専門職業人を養成することを目的とした大学院プログラムです。副専攻型の学府横断的なプログラムで、地球社会統合科学府、人間環境学府、システム情報科学府、医学系学府、工学府及び生物資源環境科学府が連携して実施しています。学生募集は4月と10月の入学時に行っており、上記の学府の学生のみが応募できます。本プログラム学生は、所属学府での研究に加えて、さまざまな現場の課題解決を行う実践的な研究を行い、それにもとづいて修了証明が得られます。

本プログラムの初年度である令和3年度は、修士課程の学生3人、博士後期課程の学生4人の計7人が入学をしました。2年目である令和4年度は、修士課程の学生8人、博士後期課程の学生3人の計11人が入学をして、合わせて18人となりました。

全てのプログラム学生は、課題研究プロジェクトIとII、課題探求チュートリアルを履修します。修士課程の学生は、これらの科目に加えてポリシーアナリシス、地球社会フィールド調査法、プログラム連携ゼミ、レクチャーシリーズを履修します。また、博士後期課程から本プログラムに編入した学生は、プログラム連携ゼミを履修します。以下では、主に令和4年度に実施した授業や本プログラム主催のセミナー等について紹介します。

課題研究プロジェクト I

課題研究プロジェクトはIとIIからなり、協働課題解決(Problem Based Learning)型の授業を通じて、課題解決に必要な知識や技法を実践的に習得し、その解決に資する制度設計や技術支援等に関して議論をします。

春学期に開講した課題研究プロジェクトIでは、令和3年度と同様に、災害対応カードゲーム教材「クロスロード」の手法を用いて、プログラム学生がプログラムに入学する際に提出した課題を素材に、ジレンマが生じる場面を想定して問いを作成することによって、各自の課題を深め、課題解決に必要な知識や技法の習得を図りました。

課題研究プロジェクト II

令和4年7月に、本プログラムと佐賀県武雄市は、市や市民が直面する課題を協働して解決をするための政策立案、実証実験(試行)等を行う場として、武雄市未来共創ラボ(以下、武雄ラボ)を設置しました。なお、武雄市と地球社会統合科学府は連携協力協定を結んでおり、本プログラムは、令和3年度の課題研究プロジェクトIIでは武雄市でフィールドワークを行いました。

武雄ラボは、全6回のワークショップからなり、前半の3回は課題探求チュートリアルとして、後半の3回は課題研究プロジェクトIIとして、授業を行いました。テーマは、「防災、コミュニティ活動、社会教育など複合的な視点から公民館の役割、機能を考える」で、各回の内容は下表のとおりです。

武雄ラボの日程・テーマ・講師等一覧

回・日	テーマ	講師等
第1回 8月 1日(月)	「防災とまちづくりに関する調査」にもとづく結果の報告	比較社会文化研究院 三隅 一人 教授
	令和3年8月の大雨による教訓を踏まえた市の主な取り組み	武雄市防災・減災課総務係・災害に強いまちづくり係 職員
第2回 9月14日(水)	「防災とまちづくりに関する調査」にもとづく結果の追加報告	比較社会文化研究院 三隅 一人 教授
	おもやいの活動	一般社団法人おもやい代表理事 鈴木隆太氏
第3回 10月 5日(水)	まちづくりと公民館—サービスと放任の二者択一をこえて—	人間環境学研究院 岡 幸江 教授
第4回 10月21日(金)	豪雨災害—響く呼びかけ、動く働きかけ—	京都大学防災研究所 矢守 克也 教授
第5回 11月15日(火) 18日(金)	課題を深める：公民館主事、区長からヒアリング	武雄市朝日公民館、武内公民館、橘公民館、東川登公民館
第6回 1月20日(金)	課題の特定／政策の方向性の提案	グループごとの発表

〇〇〇 アクティビティ



第1回武雄ラボに参加した学生・教員と武雄市職員



第1回武雄ラボに参加した学生・教員(武雄温泉前にて)



第4回武雄ラボにおける京都大学防災研究所の矢守克也教授の講義とワークショップ



第5回武雄ラボにおける武雄市橘公民館でのヒアリング

武雄ラボに関連して、11月16日(水)に、国土交通省九州地方整備局武雄河川事務所を訪問して、職員の方から話を聞くとともに、現場視察を行いました。



武雄河川事務所の職員から話を聞くプログラム学生

ポリシアナリシス

春学期に開講したポリシアナリシスは、国や地方自治体の政策だけでなく、国際機関やNGO等のポリシーを含む広い意味での政策に関してその策定や意思決定のプロセスに関わる実践的な問題を学びました。各々のプログラム学生が設定した課題をもとに、政策を作成して、政策の比較分析を行いました。そして、策定した政策を首長や上司に見立てた教員に対して、プレゼンテーションをして、説得を試みることで、政策策定の意思決定プロセスを疑似体験しました。

課題探求チュートリアル

課題探求チュートリアルは、地域共生アジェンダ、危機管理アジェンダ、文化・健康アジェンダの3つのアジェンダの課題領域に対して配置されたチュートリアル教員から、自分の研究課題に対応して、修士課程の学生は4人、博士後期課程の学生は3人を選び、その教員との話し合いによりチュートリアルの内容を決定し

て履修します。

令和4年度は、様々なチュートリアルが実施されました。そのうちの1つとして、地球社会統合科学府の荒谷邦雄教授、伊藤幸司教授によるチュートリアルが、9月20日、21日に長崎県対馬市で行われ、学生13人（うち3人はTA）が参加しました。

また、冬学期に、私が担当したポストコロナの観光政策に関するチュートリアルでは、修士課程の学生2人が副専攻の研究課題である沖縄の観光を事例に、持続可能な観光やポストマストゥリズムについて学びました。同じく、私が担当した東南アジアの政治に関するチュートリアルでは、博士後期課程の学生2人が、東南アジア各国の政治・歴史・社会について広く学ぶとともに、それぞれの副専攻の研究課題に関係する国の理解を深めました。

レクチャーシリーズ

レクチャーシリーズは、現実の社会で起こっている問題の解決を目指して、研究活動を展開している研究者、実社会で活躍する実践家、先導的見解を表明しているオピニオンリーダーなど、第一線で活動する学内外の講師を招へいし、講師による講演、学生間および学生と講師間の討論を主体としたセミナー形式のレクチャーあるいはワークショップからなります。参画する各学府で開催されるシンポジウムやワークショップ等のほか、本プログラムが企画して主催、共催するものがあります。

令和4年度からは、本プログラムが主催するセミナーは、未来共創セミナーと呼称することとしたほか、本プログラムと国、地方自治体、民間企業等が協働することにより、地方自治体の政策立案・実施・評価に関する人材開発を支援するために、新たに未来共創スクールを開催することとしました。以下は、本プログラムが主催、共催したものです。

シンポジウム

「豊かで強靱なまちづくりを目指して 一脱・緊縮の地方創生の可能性」

令和3年度の実施となりますが、令和4年3月19日に、京都大学大学院工学研究科教授の藤井聡氏、太宰府市長の楠田大蔵氏、政策コンサルタントの室伏謙一氏をお招きして、地方創生に関するシンポジウムを開催しました。会場およびオンラインで多数の参加者がありました。

水共生学主催シンポジウム

「めぐみの水・わぎわいの水：武雄での水共生のこれまでとこれから」

水共生学主催、本プログラム共催により、令和4年11月6日に

佐賀県武雄市で開催しました。第1部では、京都大学の渡部哲史特定准教授、九州大学の鬼倉徳雄教授、藤岡悠一郎准教授、三隅一人教授が講演をしました。第2部では、武雄の水共生に係る様々な方によるパネルディスカッションが行われました。

未来共創セミナー

「『外国につながる子どもたち』が直面する諸問題の現状と改善策の探求—ダブルリミテッド、ヤングケアラー、社会的孤立」

令和4年11月18日に、外国にルーツを持つ子どもたちを取り巻く諸問題に関する取材を関西で行ってきた産経新聞大阪本社の藤井沙織記者によるセミナーを開催しました。これらの問題に関心のあるプログラム学生も研究課題を報告して、参加者全員で問題の背景にある社会構造、およびその改善策を考察しました。

未来共創セミナー

「日本語上級学習者向けの理想的な教材のあり方を考える」

令和4年12月12日に、青山学院大学文学部の田中祐輔准教授をお招きして、日本語上級学習者向けの教材に関するセミナーを実施しました。前半では田中准教授から、現在の日本語上級学習者のニーズ、求められている教授法や教材についての話がありました。後半では関連分野のプログラム学生の研究発表とそれに対する田中准教授や参加者からのコメントがあり、理想的な教材のあり方に関する議論を深めることが出来ました。

未来共創セミナー

「デジタルで行政サービスをデザインする」

令和4年12月19日に、デジタル庁企画官兼経済産業省DX室付の吉田泰己氏によるセミナーをハイブリッド形式で、本プログラム主催、福岡市後援で実施しました。吉田氏は、シンガポールやアメリカでの留学から学んだことや経済産業省やデジタル庁での経験に基づいて、行政サービスのデジタル化に関する考え方や事例について、また、デジタルサービスを提供するための組織作りについて話をしました。吉田氏のわかり易い説明は、地方自治体職員をはじめとする参加者から大変好評でした。

未来共創セミナー

「海外で研究者になる—学術研究を社会課題解決に役立てる」

令和5年1月27日に、フロリダ国際大学助教授の松田宜彦氏から、主に九州大学の大学生、大学院生向けに、海外で研究者になるために必要なことや海外の大学で働いてみてわかったことについて講演がありました。併せて、開発途上国の政策や社会課題解決（雇用創出、ジェンダー平等など）の現場に、経済学を

〇〇〇 アクティビティ

使ってどのようなアプローチ（政策効果の定量的評価、学際的研究）で関わっているかについて、貴重な話を伺うことが出来ました。

未来共創スクール in 熊本

「デジタル田園都市国家構想とDXによる地方自治体の価値の創造」

令和5年1月30日に、熊本市で、本プログラム主催、熊本県後援で、未来共創スクール in 熊本を開催しました。政府は、「デジタル田園都市国家構想」を掲げて、デジタルの力で、地方の個性を活かしながら社会課題の解決と魅力の向上を図ろうとしています。しかしながら、国民や地方自治体の中には、そういった構想が目指す未来を十分に理解していない人も多いと考えられます。そのため、本プログラムでは、政策、実務、理論の観点から、構想を掘り下げるための未来共創スクールを開催しました。第一部（シンポジウム）では、内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局の菊池雄太参事官補佐、熊本県企画振興部デジタル戦略推進課の受島章太郎課長、本プログラムのチュートリアル教員である九州大学大学院システム情報科学研究院の池田大輔准教授が、政策、実務、理論の観点から、それぞれ講演を行いました。

第二部（ワークショップ）では、地方自治体の立場から、DXをどのように行政や地域の課題解決に役立てるのか、DXを使ってどのような価値を創造するのか、考えました。参加者の地方自治体職員が第一部の講演者と議論することにより、共創の場となりました。

ラオスにおける防災教育・行政への国際協力に関する調査

本プログラムでは、日本国内だけでなく、海外の社会課題の解決も視野におき、課題解決のための手法の開発、ニーズの把握、フィールドの開拓を行っております。そこで、国際協力機構（JICA）が実施する国際協力事業研修に施教授、三隅教授、私の3人が参加して、研修を活用して、将来の国際協力プロジェクトやカリキュラム作りに役立てることとしました。その中で、施教授と私の2人が、ラオス人民民主共和国を訪問して、11月27日から12月7日まで（施教授は、12月3日まで）、調査活動を行いました。具体的には、ラオスにおける住民の水害リスクを軽減するための防災教育や行政の支援のためのプロジェクト形成を目指して、ラオス国立大学、労働社会福祉省、国連児童基金（UNICEF）、セーブ・ザ・チルドレンなどの教員、職員からヒアリングを行いました。また、水害の被災地も訪問して、住民にインタビューをしました。

本プログラムでは、過去2年間、課題研究プロジェクトIIの

授業を通して、2019年、2021年に浸水被害のあった武雄市をフィールドとして活動を行ってきたため、日本（武雄市）の経験をラオスの水害軽減のために生かすことが出来ます。このように社会課題解決をグローバルな視点から考えることにより、国境を超えて役に立つプログラムになると考えています。



ラオスのビエンチャンでの住民へのインタビュー

以上のように本プログラムでは、幅広い専門性にもとづいて現場課題の発見と分析を行い、その解決に向けて政策提言を行うために必要な力を養う、多様な授業を準備しています。

既述のとおり、学生募集は、毎年4月と10月の入学時に行っております。ご関心のある学生は、入学説明会に参加してみてください。また、本プログラムが主催、共催するレクチャーシリーズは、プログラムの学生以外の方々にも公開しているものが多くあります。未来共創リーダー育成プログラムのホームページで確認してみてください。

ぜひ皆さんも一緒に、明日を切り開くリーダーを目指して実践的な学の営みに挑戦しましょう。

水共生学 キックオフ・シンポジウムの開催 「水共生学の船出～水-ヒト-生き物が共生する未来を目指して～」

藤岡 悠一郎

(地球社会統合科学府 包括的生物環境科学コース)

地球社会統合科学府の荒谷邦雄 教授を代表とする新たな共同研究「ゆらぎの場としての水循環システムの動態的解明による水共生学の創生」(通称「水共生学」)が、2021年10月から始まった。本共同研究は、地球社会統合科学府で学際研究の新たな柱となるプロジェクトを模索するなかで立ちあげられ、科学研究費補助金・学術変革領域Aの助成を受けて実施している。この共同研究は、昨今の水をめぐる環境の変化に起因する社会的な課題解決に資する学問分野をつくることを目指したものである。水をめぐる環境を、地球圏-生物圏-人間圏の三つの圏域に起因するゆらぎを常に内包する相互作用によって成立する「水循環システム」と捉え、三つの圏域のバランスの歴史的な変遷や現状の動態を解明し、地域の実態に即した水環境の社会的課題解決への道筋を探り、将来像を提案することを目的としている。

2022年3月6日(日)に、本共同研究の最初の公開シンポジウム(キックオフ・シンポジウム)を「ANAクラウンプラザホテル福岡」において、オンライン同時配信で開催した。シンポジウムのタイトルは、「水共生学の船出～水-ヒト-生き物が共生する未来を目指して～」である。

はじめに、領域代表の荒谷氏より、「ゆらぎの場としての水循環システムの動態的解明による水共生学の創生」と題する報告があり、領域全体の目標や布陣、本シンポジウムの趣旨について説明がされた。次に、キーノート・スピーチとして東京大学 沖大幹 教授より、「水共生学への期待-水循環と人間社会との共進化-」と題する講演をいただいた。本講演では、水文学の観点から水循環と人間社会との関係について、グローバルとローカルの両側面の研究成果を基に多角的に説明された。「地球上を循環する再生可能資源である水がなぜ局所的に足りなくなるのか」について、最新の水循環モデルや仮想水貿易などの観点から紹介し、「水問題の解決には、自然科学+社会科学+心の問題の理解が大事」であることを指摘された。

シンポジウムの後半では、「水共生学が目指すもの」と題するパネルディスカッションを実施した。本共同研究を構成する4つの計画研究班の代表者が、それぞれの班の目標や手法、取り組む課題などについて説明した。計画研究班の構成は、計画研究



シンポジウムのチラシ



シンポジウム風景



キーノート・スピーチをされる沖 大幹 教授(東京大学)

〇 〇 〇 アクティビティ

A01班「水共生学の創生に向けた水とその周辺環境情報の創出と展開」（渡部哲史氏、京都大学）、B02班「水共生を支える社会・文化・行動の解明：守るべきもの、変わるべきもの」（藤岡悠一郎、九州大学）、B03班「持続可能な水資源ガバナンスのミクロ実証分析」（松本朋哉氏、小樽商科大学）、C01班「流域圏生態系におけるヒトと自然の共生」（荒谷邦雄氏、九州大学）である。

その後、沖氏や会場の参加者を交えて、意見交換を行った。議論の一つのテーマは、異なる分野をいかに統合させて新たな知見を得るのかという「学術変革」の根幹の部分であった。領域の計画では、共同フィールドを設定し、地域を絞って異なる分野からアプローチすることを目指しており、そのアプローチの課題などについて議論した。「共同フィールドの数が多いのでもっと絞ってもよいのではないか」、「水文学分野では研究の余地が残るアフリカも共同フィールドに含めてはどうか」というコメントがあった。

シンポジウムの最後に、岡本正宏氏（九州大学名誉教授）が閉会の挨拶をされた。そのなかで、水に関する社会的課題を解決するためには諸分野の要素を統合する包括的なアプローチが不可欠であることを指摘された。シンポジウム全体を通じ、文理を超えた多様な観点からの報告や活発な質疑が行われ、参画者一同が本研究を進めるモチベーションを高めて高めるイベントとなった。



パネルディスカッション



質問をする岡本正宏氏（九州大学名誉教授）

シンポジウム翌日の3月7日に、領域全体の総括班会議を実施したのち、福岡県の糸島半島で巡検を実施した。参加したのは、共同研究のメンバー13名である。

はじめに、糸島半島西部の岐志漁港を訪れ、牡蠣小屋で昼食をとったのち、泊地区でため池（大塚溜池）を見学した。糸島半島は、年によっては渇水の被害が生じる地域であるため、多くのため池が分布している。ため池の構造を観察したのち、ため池をめぐる問題点や将来的な管理のあり方などについて参加者間で意見交換を行った。また、周囲がコンクリートで護岸されたため池と土塁で固められた小規模なため池を比較し、生物相の違いについて荒谷氏から説明があった。

その後、大塚溜池の近くに位置する泊大塚古墳を見学し、考古学を専門とする田尻義了氏（九州大学）が古墳の構造や泊大塚古墳の特徴などについて紹介した。そして、かつて糸島半島の低地部分が海であり、泊の周辺が海に面した地域であったことなどを説明した。

自然科学系と人文社会系の両方が参加している本研究領域では、それぞれの学問分野においても巡検の際の視点が大きく異なっていた。例えばため池を巡検した際には、A01班（地球科学系）の参画者はため池の構造（洪水吐や利水方法）、B02、03班（人文社会系）はため池に設置されている石碑、C01班（生物学系）はため池周辺の生物にまず目が向いているなど興味の違いが明確に表れた。それぞれの研究者がどのような観点で何を見ているかを理解する貴重な機会となった。



ため池の見学



ため池で議論をする巡検参加者（内田 諭 氏撮影）

「水共生学」webページ：<https://mizu-kyosei.net/>

水共生学 公開シンポジウムの開催 「めぐみの水・わざわいの水 ～武雄での水共生のこれまでとこれから～」

藤岡 悠一郎

(地球社会統合科学府 包括的生物環境科学コース)

令和3年度に採択された科研費・学術変革領域A・水共生学の一環として、2022年11月6日(日)に佐賀県武雄市役所で公開シンポジウム「めぐみの水・わざわいの水～武雄での水共生のこれまでとこれから」を開催した。佐賀県武雄市とは、2021年7月に本学地球社会統合科学府と連携協定を結んでおり、本企画はその一環として実施したものである。

そもそもこのプロジェクトは、「地球社会的視野に立つ統合的教育・研究理念を掲げる本学府で、学際研究の柱となる新たな共同研究を模索するなかで立ちあげられた。正式名称は「ゆらぎの場としての水循環システムの動態的解明による水共生学の創生」(通称「水共生学」)である。本共同研究では、水をめぐる環境を、地球圏—生物圏—人間圏の三つの圏域に起因するゆらぎを常に内包する相互作用によって成立する「水循環システム」と捉え、三つの圏域のバランスの歴史的な変遷や現状の動態を解明し、地域の実態に即した水環境の社会的課題解決への道筋を探り、将来像を提案することを目的としている。

佐賀県武雄市は、本共同研究で重点的に調査を実施する4つの共同フィールドの一つとして設定した地域である。武雄を含む六角川流域では、降水量の年較差が大きく、干ばつや洪水など

の極端気象災害が繰り返されてきた。近年では、令和元年と令和3年に集中豪雨が発生し、大規模な洪水被害が生じている。また令和4年度の夏季には、少雨による渇水に悩まされた。本シンポジウムは、佐賀県の六角川流域を具体的な対象地として、近年大きく変化しつつある水環境と人間社会、生き物との関係を見つめなおし、将来に向けて水と共生する社会のあり方を現地で多様な活動に取り組みされている方々とともに議論することを目的としたものである。

シンポジウムでは、はじめに武雄市の北川 政次 副市長に開会のご挨拶をいただいた。その後、本領域の代表者(荒谷 邦雄氏)が、「水共生とは何か?」というタイトルで領域の目指すものや本シンポジウムの趣旨を説明した。

第一部では、本領域研究に参加している4名の研究者が、水共生学を構成する3つの圏域(地球圏、人間圏、生物圏)に関する話題や武雄での研究の取り組みについて報告した。最初の報告は、京都大学の渡部 哲史氏による「武雄における水循環のゆらぎとその影響」と題するもので、過去から現在までの降水量の変動や将来の可能性を紹介する内容であった。2番目は九州大学の鬼倉徳雄氏による「佐賀平野のクリーク網は日本の宝」と題するもので、佐賀県内のクリーク網の発達が多様な魚類の生息地となっていることを報告した。3番目は藤岡が、「水をめぐる文化の行方」と題し、水にまつわる神社や伝承などについて紹介し、それらが昭和30年代以降に大きく変貌しつつあることを報告した。第一部の最後は、九州大学の三隅一人氏が「災害と地域社会 武雄市民調査から」という題で、クロスロードという手法を用いて昨年度 武雄市で実施したアンケート調査の結果を

科学研究費助成金 学術変革領域研究(A)
「ゆらぎの場としての水循環システムの動態的解明による水共生学の創生」
水共生学 公開シンポジウム
めぐみの水・わざわいの水
武雄での水共生のこれまでとこれから

日時 2022年11月6日 13時00分～17時00分
会場 武雄市役所1階ホール(最大100名様)
佐賀県武雄市武雄町大字田和12番地10
申し込みフォーム <https://forms.gle/HcdHqXCcgBvHhDQXP9>

プログラム
12:30 開場
13:00-13:10 開会挨拶
13:10-13:30 報告説明・研究紹介
荒谷 邦雄(九州大学・領域代表)
「水共生とは何か?」

<第一部>
13:30-15:00 「武雄における水循環のゆらぎとその影響」
渡部 哲史(京都大学)
「佐賀平野のクリーク網は日本の宝」
鬼倉 徳雄(九州大学)
「水をめぐる文化の行方」
藤岡 悠一郎(九州大学)
「災害と地域社会 武雄市民調査から」
三隅 一人(九州大学)
15:00-15:20 休憩

<第二部> パネルディスカッション
15:30-16:50
鬼丸 武士(九州大学)
パネリスト
・佐賀県キック・六角川流域代表 岸上 一夫氏
・一般社団法人「おもてい」・事務局 中村 由美氏
・佐賀県立大学環境・社会 藤原 第一氏
・佐賀県立大学農学部・学長 山口 裕典氏
・日本学術振興会特別研究員(PD) 山口 裕典氏
16:50-17:00 閉会挨拶

無料
事前申し込み
定員100名
定員超過分は
抽選となります

シンポジウムのチラシ



シンポジウム風景(2022年11月6日)

〇〇〇 アクティビティ

中心に報告した。

第二部では、「武雄での水共生のこれまでとこれから」というテーマでパネルディスカッションを実施した。本パネルディスカッションは、水に関わる地域の取り組みや課題について「現場の声」を聞き、武雄のこれからを考えることを意図し、武雄や六角川流域の地域で水に関連する様々な活動に取り組んでいる団体や個人の方にご登壇いただいた。佐賀水ネット・六角川代表の井上一夫氏、一般社団法人「おもやい」事務局長 千綿由美氏、佐賀県立白石高校教員 鶴田順一郎氏、佐賀県立宇宙科学館 学芸員 喜多 章仁氏、日本学術振興会特別研究員 (PD) 山口祐香氏の5名である。

冒頭でそれぞれの取り組みや地域が直面する課題などについて紹介したのち、第一部の発表者も加わってディスカッションを行った。ディスカッションでは、「地域の人口が減少するなかで防災や環境、生物多様性で重要な役割を果たすため池をいかに管理していくのか」、「都市の居住者などを中山間地域の活動にいかに参加してもらうのか」などの課題について意見を交換した。

最後に、地球社会統合科学府長 松井康浩氏より、閉会の挨拶をいただいた。そのなかで、パネルディスカッションの議論が盛り上がり、内容が充実していたとの講評をいただいた。登壇者が問題意識を共有していたことや、課題に対する幅広い視野を有していたことが、良い議論に繋がったのであろう。他方、今回は時間が十分ではなく、各課題に関する深い討議までは至らなかった。今後、同地域での研究をさらに進展させるなかで、次のシンポジウムに繋げていきたい。



趣旨説明をする荒谷領域代表(2022年11月6日)



パネルディスカッション(2022年11月6日)

シンポジウム前日の11月5日に、佐賀県武雄市において、共同研究のメンバーを中心に巡検を実施した。今回の巡検では、地球圏—人間圏—生物圏の多角的な視点から武雄を理解すべく、武雄に多数分布するため池や佐賀総鎮守で雨乞い祈願がされた潮見神社など、水に関連する施設を視察した。

最初に朝日町で改修工事を行っているため池を見学した。上流側と下流側に2つのため池があり、その下段のため池は排水された状態で堤防の工事を行っている最中であった。ここでは、将来のため池管理のあり方について、防災と生物多様性保全の両立をいかに考えるかなど意見交換をした。

その後、橘町の六角川のほとりにある河童の誓文石や潮見神社を見学した。誓文石はかつて潮見神社の宮司と河童との間で交わされた約束にまつわる石であるとの謂われがある。また、潮見神社は雨乞い祈願がされた神社でもあり、水にまつわる文化が地域の中で築かれてきたことを印象づけられた。

最後に佐賀県立宇宙科学館を訪問し、常設展「佐賀コーナー」を見学した。本コーナーを担当されている学芸員の喜多氏に展示を案内いただき、佐賀の成り立ちなどを紹介した岩石や化石の展示、地域に生息する生き物の展示などをみながら参加者間で意見交換をした。

巡検全体を通じて地球圏—人間圏—生物圏の幅広い視点から武雄の水環境を見つめることができた。異なる分野の参加者間で意見交換できることが、このような学際研究の醍醐味であり、魅力であることを強く実感した巡検であった。



改修中のため池見学(2022年11月5日)



採水のデモンストレーション(2022年11月5日)

「水共生学」webページ：<https://mizu-kyosei.net/>

自信、湧いてきました

中 立 悠 紀

(地球社会統合科学府)

(包括的東アジア・日本研究コース)

私のような者が、広報誌での執筆を依頼されたことを光栄に思う反面、何とも言えない恥ずかしさを感じて筆をとります。というのは、私の大学院時代は怠惰な生活であり、人に誇れるようなことをしていなかったからです。そのような者がこのような場で自身の経験を振り返り語ることに、どうしてもなく恥ずかしさを感じます。ですが、私が迷惑をかけてきた指導教員、マシュー・オーガスティン先生の依頼ということで、お受けしたからには、多少は有益なお話ができればと思います。

私は2012年4月に比較社会文化学府の修士課程に入学し、2014年3月に修了、その年の4月に地球社会統合科学府博士後期課程の一期生として入学しました。そして2018年3月に博士後期課程を修了しました。在学中は、主に東京裁判（極東国際軍事裁判）とBC級戦犯裁判をめぐる諸問題について研究しておりました。ここでは、修了後の韓国での就職から現在の学振PDに至る足跡を、主に紹介します。

博士号修得後、私は韓国・光州広域市にあります、私立大学・朝鮮大学校（外国語学部）に就職しました。光州は、福岡からはまず飛行機で釜山へ、そこから高速バスを使って約3時間の場所にあります。

朝鮮大学校では、最初の1年間は授業に馴れることに四苦八苦しておりました。大学院時代にTAをしていた際に、指導教員に代わって講義（私お得意の東京裁判についてなど）をさせていただいた経験はあったのですが、やはり専任教員として授業

をするのは勝手が違います。特に最初は、緊張から来る余裕の無さを打ち消すこと、学生に緊張が伝わらないようにすることに必死でした。授業内容を完璧に準備し、どのような順番でことを進めるのか、細部までイメージトレーニングしていました。

ようやく、「授業に馴れた、教室の雰囲気が作れるようになった」と思えたのは1年半が経った時でした。少なくとも自分にとって授業で大切なのは、①学生に対して自然体にオープンマインドで接すること（語弊はありますが、家族や友人と接するように。もちろん学生との距離感は忘れずに）、②自分自身が誰よりも一番に、学生たちとの時間と授業内容を楽しむことだと分かりました。このことを気づかせてくれた朝鮮大学校の学生たちには、本当に感謝しております。

2020年2月から韓国でも新型コロナウイルスが猛威を振るい始め、この年の新学期から急遽オンラインで授業をしなければならぬというハプニングもありました。これによって、また四苦八苦することになりましたが、オンラインだからこそできるアクティビティを実践することができ、自分のできる講義法・アクティブラーニングの方法の幅が広がり、かえって良い経験になりました。

学生たちの日本語会話能力は、人にもよりますが総じて非常に高く、驚きました（日常会話は困らないレベルの人がほとんどでした）。特に上級生向けの授業では、日本と韓国の間にある歴史問題（植民地支配、徴用工、在日朝鮮人、慰安婦、日韓請求権協定、韓国人BC級戦犯など）や、日本社会と韓国社会、それぞれが抱える社会問題（教育、大学、就職、労働、家族問題等）について講義とディスカッションができ、韓国人学生の生の意見を聞けるという非常によい機会でした。

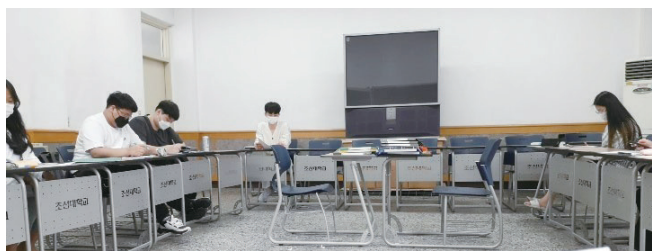
特に当時、日韓間で外交問題になっていた徴用工問題について議論できたことは、本当に新鮮な経験ができたと思います。ディスカッションである学生が発言した「合法的植民地支配というのは合法的強盗のような響きがある」という言葉は、ずっと私の心の中に突き刺さっています。植民地支配を受けた国と支配をした国の感覚の違い、他の国の主権を奪い支配することへの感覚の麻痺を感じざるを得ませんでした。



韓国・朝鮮大学校とバラ園(2019年5月撮影)

〇 〇 〇 新しい出発

また教員という立場になって分かったのは、学生の何気ない一言や意見が、なぜだかずっと記憶され続けることです。それが大学教員という仕事の醍醐味なのかなと思います。



授業の一コマ(2021年6月撮影)

また韓国滞在中に、ようやく重い腰を上げて英会話の訓練を始めました。「なぜ英語?」と思われるでしょうが、大学院時代、指導教員がアメリカ人でありながら、私は英会話の訓練を全くできていませんでした(全く地球社会を生きる人間ではありませんでした)。ですが海外に就職したことで、ようやく「海外志向」になり、自分の研究成果を英語でできるだけ多くの人に発信したいというマインドが持てるようになりました。同じ外国語学部所属の他学科の外国人数員などと、英語で会話ができるようになり、それが誇りしかかったです。ですが私を反面教師として、今現在大学院生の方には、在学中から英会話の訓練をして研究発信することをお勧めします。

その後日本に帰国し、2022年春からは明治大学で日本学術振興会特別研究員(PD)を務めております。明治大学は、東京都千代田区という日本の心臓部に立地し、近辺には国立公文書館や国立国会図書館、外務省外交史料館、靖国神社などがあり、日本の近現代史・特に中央政治の動きを研究するには、うってつけの環境です。

私を受入教員として迎えてくださったのは明治大学文学部の山田朗先生です。山田先生は、昭和天皇の軍事指導、近代日本の軍力についてや、現在明治大学生田キャンパスとなっている陸軍登戸研究所を研究しています。先生の研究と打ち出している歴史像には、日本人だけでなく、人類が忘れてはいけない歴史があると私は思っています。

山田先生のゼミは大所帯であり、様々な出自・研究分野をお持ちの方が集まっています。そのゼミ生の報告や議論に加われるのは刺激的であり、多くのことを学んで自分の研究にも取り込んでいます。他方で、私も院生の方たちに役立つポストドクであろうと、研究相談や情報提供に応じています。余計なお世話の押し売りの時もあるでしょうが、韓国での教員経験もあって、後進の役に立ちたいと思えるようになったのは私の成長です。次の大学長期休業の際には、遠足気分ゼミ生を引率して都内の資料館に行く計画です。

またこの研究分野で、自信が湧いてきました。10年近く前、修士課程であった当時の私は、生意気でありながらも先生や先輩たちの凄さに心の底で圧倒されており、ゼミでも「地蔵状態」でした。しかし今は、日本近現代史研究の様々な事柄に頭が多少回るようになり、後進にとって役立つ存在になりました。そう思わせてくれたこれまでの努力と、オーガスティン先生ら九州大学の先生方、朝鮮大学校の学生方、山田先生やゼミ生の方たちには、本当に感謝しております。

最後に、私の研究の進捗状況と宣伝をさせていただきます。

博士論文を基底とした初の学術単著の形が、2022年にほぼできあがりしました。本のタイトルは、『東京裁判・BC級戦犯裁判と帝国陸海軍軍人 ―裁判対策、戦犯釈放運動、靖国戦犯合祀、歴史修正主義』と予定しております。本書は、東京裁判・BC級戦犯裁判の裁判対策を日本政府内で練り、サンフランシスコ平和条約発効後は戦犯釈放運動と靖国神社への戦犯合祀を推進した帝国陸海軍軍人たちが、さらに「スガモ組政治家」(岸信介、清瀬一郎)の思想と行動を分析したものです。本書では、昭和の戦争と、このような一部の旧軍人・戦犯たちが「もう一つの戦争」と呼んだ戦犯裁判という「二つの戦争体験」から培われた思想を「スガモ思想」(傍流の戦後思想)と呼び、この思想と行動が、日本の政治・外交・社会・思想、そして国際関係・平成期の歴史修正主義運動に与えた影響を、1930年代から1990年代に至るまで体系的に纏めた内容になります。

今日、「地球社会の諸問題」を解決するにあたって、東アジアでその協力関係の深化を阻んでいるのは、冷戦の残滓というべき国際関係とともに、日本帝国の対外戦争をめぐる歴史和解の困難性です。本書は、そのことを考えるにあたっての一つの材料を提供します。すなわち、日本社会に伏流し続けた、「あの戦争について弁護したいことがある」という情念のウネリを、長い時間軸、広い空間軸から考察します。歴史学、社会学(歴史社会学)、政治学、国際政治学の知見を横断し、歴史問題に関心のある韓国や中国、アメリカなどの人々にとっても読みごたえのあるものにします。学際性と国際性を謳った九州大学大学院地球社会統合科学府の修了生にふさわしい内容としますので、どうぞご期待ください!

博士論文を書き終えて

謝 帆

(地球社会統合科学府 言語・メディア・コミュニケーションコース)

私の博士課程は、コロナで始まり、コロナで終わります。

この3年間は、どんな学生にも、どんな研究者にも、どんな人にも、かつてとは全く違った3年間だと思います。学生としてはキャンパスライフをまともに楽しめず、研究者としては学会とシンポジウムの延期と中止、地域間の移動制限、参考文献の入手困難により研究が行き詰まってしまって、また子女としては家に帰れないつらさも味わいました。博士学位にONLINEという言葉をつけなければいけないかと、大学の同級生たちと冗談を言い合ったりしたこともあります。

しかし、痛みには鈍感な人間かもしれません。ごく一部を除いて、この3年近くの研究生活は、面白い、新鮮な、充実したものであったと思います。自分が研究したいテーマを選んで、その考えを具体的な行動に移して、さらに学位取得に繋がっていきました。これほど面白くて、素朴なことがあるのでしょうか。

私の主な関心分野は、日本文学の翻訳・比較文学・検閲文学です。博士論文の中では、文化大革命の政治イデオロギーの宣伝を達成するために翻訳された日本の文学作品とその原作との比較検討を通し、中国の内政、外交政策を分析しながら、中国側の日本の文学作品に対する解説に焦点を当て、10年間という長きにわたる文革期の中国における日本文学の翻訳実態を解明することを目指しました。

博士論文において、文革時代の日本文学翻訳の実態について、マクロの視点、すなわち作品の外部のみ注目してきた従来の研究を踏まえた上で、小林多喜二『蟹工船』、三島由紀夫『豊饒の海』4部作、有吉佐和子『恍惚の人』、小松左京『日本沈没』、堺屋太一『油断!』や文革期の翻訳雑誌『摘译』に掲載された作品など、文革期に翻訳された日本文学の原作テキストと翻訳テキストを分析対象とし、具体的な事例を通し、作品そのものに照明を当てて、体系的、網羅的であると同時に緻密な作品分析を試みて、文革期における日本文学の翻訳実態について、その輪郭を描くことができたいと思います。そして、時代がどのように翻訳に反映されているか、翻訳が時代においてどのように働いているかなど、特定時期の翻訳に関わる今後の研究にその研究方法をある程度提供していると考えております。



小林多喜二『蟹工船』の表紙

『摘译』1975年第2期

また、博士論文は比較文学の研究でありながら、文化大革命に関わる研究の一分野でもあります。特に近年、中国ではその全体的な政治上の環境もありましたので、文革研究を含めて、研究の幅がある程度狭まってくと考えられます。中国の自己認識にも関わっている文革研究の重要性、特に新たな未来、新たな中日関係を迎えていく今日において、その学術上の喚起は研究の目的の1つでもあります。

修士課程から西野常夫先生の研究室に所属しており、この紙面を借りて、指導先生の西野先生に心より感謝を申し上げます。何よりも西野先生の惜しみないご指導と、また私の選択に対する揺るぎないサポートが、博士号を取得するための最大の助けとなりました。

また、九大に在る5年間、いつも貴重なご意見とご指導をいただいた指導教員団の秋吉収先生、波瀾剛先生、小林亮介先生、堀井伸浩先生と日本近代文学講座の松本常彦先生にお礼を申し上げます。

この4月に、人生の新しい章を迎えますが、コロナのないスタートとなるということを祈っております。

今、この瞬間も、自分の人生の中で「博士」という言葉の意味を探っているのかもしれませんが。それが今後の自分の学術生活に何をもたらすのか、私にはまだ知る由もないのです。学問が私に与えてくれたものを、これからも探求していきたいと思ひます。

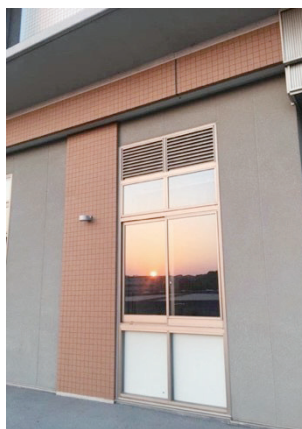
万物の逆旅、百代の過客

孫 平

(地球社会統合科学府 言語・メディア・コミュニケーションコース)

2022年4月22日に伊都キャンパスから自宅に帰ったとき、窓に映し出された夕日があまにも美しく、写真をとりました(左)。その時、頭に浮かんだのは「夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり」という言葉です。これは、李白の『春夜宴桃李園序』中の一文で、時間の速さと人生の短さを表現しています。

このような感想が生まれたのは私が提出した博士学位申請論文が受理されたと聞き、博士課程に入学してからの三年間を振り返り、時間の経つ速さをしみじみと感じたからです。ちょうど三年前の同じ頃、私が本学府に入学したばかりのころ、図書館一階の窓際から元気に咲いているツツジを見ました。新しい環境への不安より美しいキャンパスで研究と生活を始める幸福感と憧憬で私の心はいっぱいでした。



イーストゾーン



中央図書館一階の窓際

本学に入学する前、私は鹿児島大学の人文社会科学部で一年間半の留学生生活を送っていました。そこで日本近現代文学の授業を受け、文学作品を読解する基礎的な研究方法を学び、文学研究の面白さを発見しました。それをきっかけに私は本学の博士課程に入学し、研究を続けるようになりました。その時、お世話になった先生はいつも「いろいろ悩む前に、とりあえず作品を読んで、とりあえず書く、書くうちに課題が立てられるかもしれません」とおっしゃいました。思えば、私が博論を順調に書き上げられたのは、鹿児島大学で、理想の研究者像を見つけ、そこでいただいた真摯な助言と指導に深く関わっています。

博士課程に入ると、指導先生から、個別の作家とジャンルに拘らず、日本近現代文学に関する課題に取り組めばいいですよと言われました。当初、私は松本清張文学を既存の観点とは別の視点から再評価する意欲を持って、作品と連載雑誌との関係に取り組んでいました。特に女性誌に連載された作品に注目しましたが、順調には進みませんでした。一千作以上の清張作品から一つのテーマを選定するのは難題で、私はあらずじに基づき、小説に登場する要素を抽出し、一覧表を作りました。こうした作業を通じて、清張の法廷や裁判事件を描く作品がまだ十分には研究されていないことに気づきました。

博士論文では、法廷空間と社会空間の比較、取材事件の虚構と現実、事件を再現する立場の異なる語りの問題、作品の創作方法、作品に刻まれた法廷をめぐる同時代の言説、法廷に絡む人間、特に女性の造形や異なるメディアに描かれた裁判事件の意味の変遷などを論点に、法や裁判事件が清張の小説世界ではどのように解釈され、意味付けられたのかを解明しました。また、法廷ミステリーという用語の誕生の経緯及び概念の流通、清張の法廷ミステリーが日本の法廷ミステリーや裁判小説の中にどのように位置付けられるなどの問題も考察しました。

異なる作家とジャンルの文学作品を研究するには様々な方法がありますが、文学研究には原文と大量の研究論文の精読がまず第一歩です。それらの研究論文から手本を見つけ、論点の立て方を学び、作品を分析してみるのが自分の最初のやり方でした。書くうちに書き方を学び、身に付けることができます。また、私は小説の初出と初版のテキストの比較を行い、小さな本文異同からその書き替えの経緯を遡及的に考察するのが好きです。地道な作業ですが、時々面白い発見があり、そうした発見を論文で展開するのはさらに無上の喜びです。

私はいま博士号取得後のキャリアについて、今後どのような研究を続けるのか悩んでいるところです。いま、博士論文を執筆している皆さんは、ぜひ試行錯誤を繰り返し、自分にとって一番相応しい、有効な研究方法を見つけてください。「百代」の「過客」に過ぎない私たちが特定の研究分野で価値ある論考を残すことができるのは素晴らしいことではないでしょうか。

博士後期課程を自省して

御代川 涼

(地球社会統合科学府 包括的生物環境科学コース)

行き当たりばったりの博士後期課程でした。4年間の地球社会統合科学府での大学院生活の中で得たものはいろいろあれど、最も有用だったのは、自らの性根に対しての理解が進んだことでした。

私の研究テーマはヒドラと緑藻の共生メカニズムで、他学府で行っていた研究を継続していました。そのときから楠見先生に協力していただいていたため、生物多様性講座に所属することに。当時は修士論文の研究を発展させ、投稿論文を書いていけば学位を取得できるとおぼろげに考えていました。もちろんおぼろげな考えでは学位に行き着くのは難しく、研究を進めて手法を検討したり、ある程度データがそろった段階で明確な学位論文のビジョンを描く必要があります。それを怠っていたため、学位の取得が博士後期課程4年目の末日というぎりぎりの時期になってしまいました。研究の進める道筋として、網羅的に解析を行って全体図を描くのか、はたまたある事象の細部を詰めていくのか、後になるまで、ふらふらしていたのが失敗でした。研究のゴールは、中途での変更も考慮しつつも、早くに設定しておけばよかったです。

さて、生物多様性講座では生態や分類といった生物のマクロなところに重点を置いて研究することが多かったため、私の研究である分子的な共生メカニズムとはやや分野が離れていました。これ自体は、より広い視野をもって研究を進められたためメリットも大きかったのですが、セミナー等で突っ込んだフィードバックを得るのが難しいことにもつながりました。学生や研究者の集まりや学会に積極的に参加し、最新の研究のトレンドを学び、分野の研究者からの指摘を受ければ良かったと思います。

博士生活で最も助けになったのは、学振DC2に通ったことでした。3回目の申請で通ったため、特別研究員だった期間は3年目と4年目でした。結果的に期間中は在学していましたが、申請書を書いた段階では後半1年は学位取得後になる計画でした。これが厄介で、学位取得の準備する時期に学振の有無で研究計画に大きな変更が生じてしまう可能性があります。とはいえ研究計画書の執筆は、研究の方向性を再考するにうってつけでしたし、結果的に4年間博士後期課程に在学することになったので、大いに助けになりました。収入の当てができたため甘えてしまった部分もありますが、比較的安定した収入と研究費の支給によって余裕を持って研究に取り組めました。大学による経済支援なども充実してきているので、学振とあわせて調べてみることを

をおすすめします。

私は、博士後期課程から地球社会統合科学府に入学したため、学際的な取り組みには必修科目およびフューチャーアジアプログラムの少数の講義でしか関係しませんでした。入学前に研究テーマに手を入れないと研究の幹にするのは難しい印象です。私の周りでも、学際的な要素を取り入れて研究していた人は珍しかったです。とはいえ、学際的なテーマで研究をされている先生もいることや共創学部からの学生の受け入れといった要素もあり、将来的には期待できる点もあるのではないかと思います。振り返ると、分野横断的なワークショップや外部講師を招いての講義も盛んだったので、いかに環境を利用して見識を深め、研究に取り込んでいくか考えておけばよかったです。

これまで難点を挙げてきましたが、在学して良かった点はフィールドワークの重要性について実感できたことでした。必修として、地球社会フィールド調査法の講義があり、フィールドワークに取り組む心得を習得できました。フューチャーアジアプログラムでは、フィールドワークの資金を助成してもらい、東北地方での野外調査に取り組むことができました。研究室でも毎週のように野外調査が企画されており、私も時々同行しました。熟練した野外での調査方法を学ぶことができましたし、なにより野外調査へのハードルが下がったのが収穫でした。野外調査を通して、研究テーマ外にも見識を広め、貢献できたことをうれしく思います。

新型コロナウイルスによる影響は、PCでの解析が主だった私の研究にも大いにありました。自宅においても研究のある程度の部分は進行できるものの、大学における人との交流がオンラインに限定されるため、助言をもらったり、指導をしたりする場が大いに減ってしまい、学術的な刺激を受ける機会が減ってしまいました。また、緊急事態宣言時には、実験生物の飼育は継続していたのですが、実験の進行は中止され、もどかしい思いをしました。大幅な研究計画の変更が生じなかったのは不幸中の幸いでしたが、先行きが見えない中博士後期課程で研究するのは、霧の中にいるようで気をもみました。しかし、これも行き当たりばったりの計画性のなさ由来するところが多々あると思うので、研究においては適切な目標を定めてから走り出すべきでした。

月並みな結論になりましたが、皆さんの反面教師にしてくださいと幸いです。

地球社会統合科学府 令和四年度 修士課程 修士論文題目一覧

1	土家族研究における学説の典型化－双鳳村と婿取り婚に着目して－
2	A Frame Semantic Analysis of the Wordlist of the TOEIC Listening and Reading Test
3	継承語として日本語を学ぶ子どもたちにとって「ことば」とは何か －日韓国際結婚家庭の子どもの言語ポートレートからの考察－
4	"Study on the Evaluation of Disease control and Plant growth of lettuce (Lactuca sativa L) plant by Application of Spent Mushroom Substrate of Lentinula edodes"
5	画一的に進む新聞社の経営危機とニュース・ポピュリズム－同質性の高い日本モデルがもたらしているもの－
6	鉄製武器の流通・消費からみた古墳時代後・終末期における地域編成
7	戦後の日本における石炭産業政策と三池炭鉱－1962年から1967年まで－
8	現代中国SNSにおける自己性化に関する考察－JK制服文化を手掛かりに－
9	松本清張作品における女性像
10	インド・モンスーン変動の復元：古カトマンズ湖堆積物の粘土鉱物分析から
11	現代中国語の新聞記事と会話における指示表現に関する研究－談話モデルからのアプローチ－
12	賀川豊彦における「神の国」思想－思想形成期から1920年代の思想確立まで－
13	「技能実習」から「特定技能」介護分野への移行に関わる要因の解明 －ベトナム人元技能実習生へのインタビュー調査を通して－
14	中国進出日系企業の立地条件の変化への対応と定着の背景－青島市の機械装置メーカー新東工業を事例に－
15	ベトナム人技能実習生の日本語使用の実態－学習ストラテジーに焦点を当てて－
16	更新世初期(MIS91-95)における北大西洋の気候変動と大陸氷床崩壊の関係
17	15～16世紀における朝鮮と東南アジア
18	A Biomechanical Study of the Transition from Foraging to Agricultural Activities in Prehistoric Japan using Cross-sectional Geometry of the Femur
19	中国語の談話連結語“不过”、“但是”、“可是”の接続的意味について－関連性理論からのアプローチ－
20	近世初期における大名の子弟教育－黒田長政を事例として－

21	Empirical analysis of the determining factors in how migrant workers in China's counties decide where they will settle. Case study: Lushi County.
22	中国における FSC 森林認証の現状と課題 —— 審査報告書のCAR分析から
23	松本清張作品と中国推理小説との比較研究 —松鷹『杏焼紅』を中心に—
24	韓国における社会運動の展開 —ろうそく集会 2008から2016へ—
25	関連性理論を用いた日本語終助詞「かよ」の分析 — SNSなどに見られる非典型的な用法を中心に—
26	周作人と中国近代児童文学 ——“ 小さな野蛮 ” の形成をめぐって
27	ミヤマクワガタ <i>Lucanus maculifemoratus</i> の分子系統学的研究
28	アイドルファンと政治的可能性 — BTSファン「ARMY」の実証分析—
29	韓愈詩に見られる台風について
30	緊急事態における地域住民による共助の考察 ～社会関係資本の視座から中国の共助組織に着目して～
31	オンラインインターンシップによる就業意識の変化に関する研究 —九州 x 香港L大学プログラム参加学生を事例として—
32	SNSとネット暴力 ——中国 e スポーツのファンダムを事例として——
33	南北朝・室町期幕府地方支配と大内氏

編集後記

『Crossover』第48号をお届けします。現代世界の直面するさまざまな問題が、例年にも増して顕在化した1年となりました。それらと向き合う統合的な学際性を涵養する本学府の理念は、こうした背景のなかでより一層大切なものと感じられます。執筆にご協力いただいた皆様にあらためて感謝申し上げます。

ISGSのロゴの説明



新学府開設にともない、「地球社会」に関するゆるやかに繋がる研究領域を6つのコース、「包括的地球科学」「包括的生物環境科学」「国際協調・安全構築」「社会的多様性共存」「言語・メディア・コミュニケーション」「包括的東アジア・日本研究」に編成しました。このロゴの三角形は、この6つの研究領域を象徴しており、それらが融合しつつ未来へと前進するようすを表しています。ロゴのカラーは、本学府の前身である比較社会文化学府のイメージカラーを引き継いだものです。



ISGS

GRADUATE SCHOOL OF
Integrated Sciences for Global Society

発行者 九州大学大学院地球社会統合科学府
発行年月 2023年3月

〒819-0395 福岡市西区元岡744
TEL : 092 (802) 5786・5787
FAX : 092 (802) 5791

ホームページ : <http://isgs.kyushu-u.ac.jp/>